

トマトでトマトキバガの被害を初確認！

茨城県病害虫防除所は県内の施設栽培トマトで果実に寄生していたトマトキバガの幼虫を確認したことから、令和8年10月14日付けで病害虫速報 No. 6 を発表し注意を喚起しています。

本種は、令和5年に県内で初めてフェロモントラップに誘殺されましたが、農作物での被害が確認されたのは初めてです。

本年も4月上旬から誘殺が確認されており、8月以降誘殺数が増加していますので、トマト圃場等への飛び込みによる発生に注意してください。

トマトキバガは、小型の「ガ」で、主にトマト、ナス、ピーマン、パレイショ等のナス科の作物を食害します

形態の特徴

- (1) 成虫は、翅を閉じた静止時で体長5～7mm（前翅長約5mm、開張約10mm）。前翅は灰褐色の地色に黒色斑が散在する。後翅は一様に淡黒褐色で、翅頂下でえぐれる（写真1）。
- (2) 終齢幼虫は、体長約8mm、体色は淡緑色～淡赤色で、頭部は淡褐色である。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある（写真1）。



写真1 トマトキバガ成虫（左・中）と終齢幼虫（右）

写真1、2は、農林水産省植物防疫所原図無断転載厳禁

被害の特徴

- (1) 茎葉の内部に幼虫が潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の被害は、ハモグリバエ類の食害痕と類似するが、ハモグリバエ類は線状に痕を残すのに対し、トマトキバガは面的に食害する。トマトキバガの食害部分は表面のみを残した薄皮の袋状になり、葉の裏面からでも透けて見える（写真2）。
- (2) 果実では、幼虫が食入して内部を加害し、数mm程度の穿孔痕が生じるとともに食害部分が腐敗する（写真2）。



写真2 トマトの被害

防除対策

- (1) 施設栽培では、開口部に目合い 0.8mm 以下の防虫ネットを設置し、施設内への侵入を防ぐ。施設ビニルや防虫ネットに破損がある場合は必ず補修する。
- (2) 圃場をよく観察し、初期の被害を見逃さないようにする。
- (3) 被害葉や被害果は、圃場から持ち出し、野外に放置せずに、ビニル袋に入れて一定期間密閉して成幼虫を死滅させるなど、適切に処分する。
- (4) 本種は、マルチ等の農業資材にも付着している可能性があるため、栽培終了後は野外に放置せずに、適切に処分する。
- (5) トマト、ミニトマト圃場で発生が認められた場合は、発生を拡大させないため、表を参考にトマトキバガに登録のある農薬を散布する。また、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRAC コードの異なる農薬をローテーション散布する。

表 トマト・ミニトマトのトマトキバガに登録のある主な農薬一覧

（令和8年10月21日現在）

薬 剤 名	希釈倍数	使用時期 / 使用回数	分類 ※
ディアナ SC	2,500～5,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	5
アニキ乳剤	1,000 倍	収穫前日まで / 3 回以内	6
アフーム乳剤	2,000 倍	収穫前日まで / 5 回以内	6
コテツフロアブル	2,000 倍	収穫前日まで / 3 回以内	13
フェニックス顆粒水和剤	2,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	28
プレバソンフロアブル5	2,000 倍	収穫前日まで / 3 回以内	28
ベネビア OD	2,000 倍	収穫前日まで / 3 回以内	28
グレーシア乳剤	2,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	30
プレオフロアブル	1,000 倍	収穫前日まで / 2 回以内	UN

※分類欄は、IRAC コードを記載。

■ 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用してください。

■ 宮農 News は J A 全農いばらきホームページでもご覧になれます。